# 慈眼寺たより

第10号
平成２３年７月
春日井市下市場町
「慈眼寺」
電話　81‐6801
編集　伊藤秀文

## ☆終の住処★

下市場町五丁目　佐々木清

昨年、編集者から本紙に投稿を依頼された。由緒ある慈眼寺の広報紙故に気後れがして一旦お断りしたが、再びの依頼でした。特にテーマは与えられなかったが、「慈眼寺たより」に相応しい話題は思い当たらず、拙文を顧みない失礼をお許し願うばかりです。

先ずは、新参者の「馬の骨」から・・。源を信州諏訪湖に発し、遠州灘に注いで暴れ天竜の異名をもつ大河、その天竜川を西に遡ること数十キロ。愛知県の北東部に位置し、東は豊根村、西は稲武町、設楽町、北は長野県根羽村に境を接し、周囲を千メートル級の山々に囲まれ、盆地状を呈した高原の村で、標高は六八〇メートル（役場所在地）で県下では最も高いところに位置している。そこに降った一粒の雨はその大半が天竜川水系大入川へと流れ、その他は北へ流れる矢作川水系丸山川、南へ流れる豊川水系簀ノ子川へと、それぞれ下流域の大切な水源地域であります。その源流に近い大入川（津具川）の傍らで清流の音をバックグラウンドに学び育った北設楽郡設楽町津具を巣立って早くも半世紀以上が経ち、二年前には嘗ての幼友達と皆で古稀の健康を喜んだ。その時同窓の何人かは既に黄泉の国へと旅立っていた。その現実を認識したとき、何が無くても、健康に恵まれ乍ら、人並みに天寿を全う出来ればこれに勝るものはないと実感したものでした。

さて、下市場に転入したのは昭和三九年の秋だったと記憶しています。その当時、国の政策で始まった住宅金融公庫の貸付制度に応募したところ偶然にも一発で当選してしまったが、その時点では未だ二五歳になったばかりで資力のあろう筈もない。この千載一隅のチャンスを生かすべく、故郷の両親を説得し、その支援を仰いだのは云うまでもありません。

かくしてこの地に新築家屋を持つことができた。二年後の昭和四一年、二七歳で現在の妻と結婚し、共に此処を「終の住処」と決めた。そして娘と息子に恵まれた。現在娘はシアトルに在住一六年、息子は横浜で妻と一人娘の三人暮らしを続けていますが、結局二人の子供達は故郷下市場に戻る可能性は殆どない状況になっているなか、区画整理後に分家として一区画の墓地を分けて頂き、檀家としてこの貴重な墓地を妻と共に除草など管理をしておりますが、子供達に受け継がれ難い状況をどうしたものかとの思いが脳裏を掠める時もある昨今です。「幸せ」とは良い事、悪い事が適当に混ざり合った状態だと云われますが、その為に今の形、バランスが崩れないことを願い「晩節を汚さず」を心に一日々々を大切にして生きていこうと思っております。私もこの四月で七二歳を過ぎ、結婚以来四五年の長きに亘って多くの方々にお世話になり、ご指導をいただいて来ました。

「郷に入っては郷に従え」と云いますが、人にも環境にも満足できる住みよい町だと総てを受け入れ、感謝する日々です。

昨年三月、五二年間勤めた会社を七一歳で退職してからは、居候のような生活ですが、これがまた、結構楽しい。現役時代とは別の意味で充実している。特に発足以来

（裏へ続く）

## 《青柳歌壇・俳壇》

沿海線　雪の人影　西へ行く
東日本　地震（ない）あり　雨の河津桜
‐伊藤清雄‐

三回忌　終えても癒（い）えぬ我が思い
妻の遺品は　手付かずのまま

相集（あいつど）い書く読む話すこと学び
老化防ぐか　自分史の会
‐今井正‐

車椅子　押しつつ夫（つま）に　語りかくる
交々の事　埒もなき事
‐た‐

被災地の　気象情報聞きながら
避難所暮らしの人ら　思いぬ

母の家　仏間に通す　青田風
掘り上げし　新じゃが畝に　散乱す
‐貴美子‐

施餓鬼旗　山盛り飯に　突き押せり
六道の　灯ともし頃や　雷雨来る
‐孝子‐

三三年間もの歴史を刻む「南城高原会」に在籍し、皆さんと和気藹々のゴルフを楽しんでおります。

それにしても「女房」とは有難いもの、お礼の一言も云わず何でも口先で使いまくっておいて、その上偉そうなことも言える。そんな妻は家の宝であり、まさに福の神だと思います。だから「おかみさん」と言えるのでしょう。物質的ばかりでなく、精神的にも家の宝だと思います。従ってその大事な「神」さんがもし不在となればこれは一大事、「火が消えた」ようなものでしょう。それ程大切であることが解っていても、一般的には男性は意外と女房を大切に扱わないようです。未だに「男尊女卑」の思想が尾を引いているのでしょうか？　これは他人事ではなく私自身も含めて大いに反省すべきことだと思っております。

では、夫は妻のどこにより所を求めているのか。多分それは「信頼」以外にないと思う。信じ頼ること。つまり頼りがいがあるからであり、もし、頼り甲斐がなかったら一日も一緒には暮らせないでしょうから。お互いが頼り、頼られること、その心が全てを許したり、こらえたり奉仕したりして、その代償を求めないからだと思います。

孫娘にも恵まれ、この頃実感することは、四五年に及ぶ下市場での生活は充実しており、日々幸せに暮らしております。かくして「よそ者」「新参者」と云う認識はなく下市場町民としての市民権を得たというより寧ろ「主」としての自覚を持つべきであるとは、云い過ぎでしょうか？

生まれ故郷を離れて半世紀以上過ぎ、思い返せばいろいろな事も有りましたが、その結果として今がある訳です。そうした全てを受け入れ、思うことは「わが人生にチョッピリ悔いあり？」でしょうか。下市場町こそ我が「終の住処」として安心・安住の地であることに安堵しております。

時の経つのはあまりに速く、清少納言は「枕草子」に次のように書きとどめています。

「ただ過ぎに過ぐるもの、帆かけたる舟。人の齢。春夏秋冬」と。

## ☆ おばあちゃんの教え★

櫻井尚

私の祖母(1873~1958)は「渡る世間に鬼はいない」と言って、満州へ嫁に出した末娘が初産するから行ってくるといって読み書きも出来ないにも拘わらず一人で行ってきました。婆ちゃんは八五歳で死ぬまで不平不満や人の噂話は一切した事がありません。「天網恢恢疎にして漏らさず」と言って神様は全てご存知だ、人の陰口を言うのは天に向かって唾する様なもので全部自分に懸かって来るから言葉には気をつけて丁寧に優しく美しくする様に、など等全て婆さんから教わりました。最近親が子供を苛めたり殺したり子供が親を殺す等考えられないような記事が出るたびに婆ちゃんが言った事、「人は自分一人で今があるわけではない。ご先祖様はじめ皆様のお陰で生かされているのですよ。感謝の心を忘れないで破廉恥な事をしないように、特に小さい子、弱い人を労わり助けてあげる様に。そうして嘘は泥棒の始まりと言って決してついてはいけません。　植村花菜さんが歌った「トイレには女神様がおられる・・・」は婆ちゃんにお教わった事を歌った様だが私の家でもトイレを新築した時にはトイレでうどんを食べると中気にならないと言われて実行されています。子は親の背中を見て育つと言われますが、正にその通りだと思います。私たち自身が已を慎み恥ずかしい事はしない様お互いに助け合い労わりあって平和で明るい済みよい町にしたいものです。ゼロの日に交さ点で「お早う」と声を掛けても何の反応も無い人の多い事に驚かされる昨今ですが、ナンデカナー。地球が風邪をひいたかなー。もっと重い病気に懸かったカナー、ナンデカナー。解からない事ばかりでこまちやうワー。　（九〇歳）

本稿は、九号「長寿の秘訣」の補遺としていただきました。

## お盆のお知らせ

**① 棚経の日程**

八月十二日　浅山、鳥居松
　　勝川、名古屋方面
八月十三日　四谷、南部
　　熊野、神領方面
八月十四日　下市場　穴橋　掘北
八月十五日　穴橋、関田、上条
　　高蔵寺、坂下方面

右は原則です。
別途個別にお知らせします。

**② お施餓鬼**

お施餓鬼は、毎年八月十八日で今年は木曜日になります。七月一日から受付をしております。早い時間帯は、予約済みになっております。ご希望の方はなるべく早めにお申し込みください。電話で結構です。

お布施は今までどおりで
初盆施餓鬼　五万円
特別大施餓鬼　三万円
大施餓鬼　二万円
合同施餓鬼　一万円　です。

**③ 精霊流し**

八月十五日の午後四時半から慈眼寺の山門で、檀方総代の方にお願いして集めてもらっております。まとめて供養のうえ処分しております。明るいうちにお持ちください。

## ☆震災で思うこと★

住職　春日井浩道

三月の東北地方の大震災では二万五千人もの方が亡くなられ、また多くの方が家ごと生活基盤を失ってしまいました。謹んで、お悔やみ・お見舞いを申し上げます。

三陸のあたりは、明治以後でも大きな津波が三度も押し寄せ、明治の津波でも、今回と同じくらいの二万人以上の死者が出ていましたので、よほど警戒されてもよかったのでしょうが、こんな結果になってしまいました。震災前の写真を見ると、ほとんど海岸まで溢れんばかりに家屋が密集し、まさにのどかで豊かな海辺の街の様子が見られました。何年も安穏な日常が続くと、突然十五メートルも海の水が盛り上がってくるようなことは、とても考えられないのでしょう。ましてや、千年に一度、それも海から何キロもの内陸までも上って来るとは誰が想像出来たでしょう。世界一だといわれた津波防波堤もあっという間に壊れてしまったそうです。

話は変わりますが、三月に健康診断を受けたら、前立腺ガンの指標であるPSAの値が高くなっていました。四以上は危険域だという値が、なんと七近く。日本人の半分はガンで死ぬと言われているので、これは年貢の収めどきかと腹をくくりました。いやーそれにしてもやり残したことは一杯あるな。親より先に死ぬのはまずいな、とか。再検査の結果、まあそんなには高くなっていないので、なんかの間違いだったのでしょうということになりました。でも、これが本当に前立腺がんだったらどうなんでしょうか。生活なども一変していたでしょう。

昨日まで、平穏でなにも起こらないと思っていた。いや、平穏に慣れてしまって想像もできないようなことが突然に起こります。ガンなど俺には関係ない話だよと思っていたのが、医者から突然に切りましょう、あと余命半年です、なんて言われることになり、その半年もバタバタと過ぎてしまいます。いや、よく考えてみると異変なんてものは、むしろ突然に起こるのが普通であって、起こることが予想されているようなものは、異変ではないのです。先代の黙定和尚も、丁度一五年前の七月の終わりころ、異常を見つけ、そのまま秋には亡くなりました。それまでの健康状態からは想像もつかない進展でした。

落椿　遠くの友が　一人減り
―秀―

話は震災に戻ります。今度の被害は遥か東北だったので、こちらの方ではあまり関係ないかなと思っていましたら、親族が亡くなったとか在所が被害に遭ったという話をいろいろお聞きしました。なかには、学校が春休みに入ったので帰省したとたん、津波に飲まれたとか。その逆に、私の友人の息子さんは仙台へ単身赴任中だったのが、出張で名古屋へ来ている時に地震が起こって助かったとか。何が運、不運なのかは、結果を見てみなければ言いようのないこともあります。昔、海軍で不沈といわれた戦艦武蔵に乗り組めなくて残念がっていた人が、後になってそれが命拾いになり、武蔵の沈没で息子を亡くした遺族から恨まれたというようなことを聞いたことがあります。まさしく「人間万事塞翁が馬」を地で行くような話です。それぞれの場合に重い決断や軽い偶然が絡み合って運命が決まっていくのでしょう。

また、今度の震災で大変なのは原子力災害が生じてしまったことでしょう。想定外の津波だったと言ってしまえばそれまでですが、一旦破壊されればこういう結果になることは自明だったのですから、そういう言い訳が通るかどうか。何でも順調に行っている間だけみれば、「とても安全」なのは当たり前です。ただ、電気なしでは生活できないようになってしまったこの時代、どうやったら乗り越えられるのでしょう。人間という生き物は意外と絶滅危惧種に近い位置にいるのかもしれません。

さらにもう一つ、こういう国難というような時に、やたらしゃしゃり出て威張り散らす浅はかな政治家が目立ちました。こういう時こそ、人の上に立つ人は、国民を励まし、勇気づけるものでなくてはなりません。ましてや、選挙で選ばれ大臣にもなった人がまるで自分のポストを誇示するような、情けない態度を見せていました。本当に自分のお役目を自覚しているのでしょうか。そんな人に復興の重い役を任せていいのでしょうか。任命した総理大臣の「人を見る目」が疑われるような出来事でした。これも人災でしょう。

**震災・暑中お見舞い申し上げます**

檀方総代　伊藤辰男
仝　伊藤久幸
仝　伊藤秀文
仝　伊藤正広
仝　大野和義
仝　大野悟
仝　木村広孝
住職　春日井浩道

★大黒写真展一等賞☆

小牧市妙林寺で行われた「大黒まつり」の写真展で、伊藤清雄さんが一等賞を取られました。

中日新聞

★お盆あれこれ☆

お盆はもともと、陰暦の七月十五日（満月の夜）に先祖の霊と交感できるという、アジアの古い習慣が元になっているといわれます。それが多分稲作の文化と一緒に日本に伝わっていたのでしょう。宮中でも八世紀にはお盆の行事が行われていたそうです。今では一部の地域を除いて八月十五日に行われています。

また、仏教では、お釈迦様の十大弟子であった目連尊者が、自分の母親が餓鬼道に落ちて苦しんでいるのを、お釈迦様のアドバイスでお供え物をし、僧を集めて供養したら、苦しみから解放されたとか、阿難尊者についても同じような、餓鬼供養の伝承があります。

今のお盆は、この二つの流れにさらにそれぞれの土地や民族の習俗が交じり合って仏教行事になっています。まず、迎え火が焚かれます。十二日か十三日の夕方です。これは、あの世からお帰りになるご先祖様の道しるべになるもので、村の境界で松明を焚き、ついでお墓や村の要所などで焚かれます。村の境界をあの世との境界になぞらえたものでしょう。当地区では、内津川の川原などで焚かれます。ご先祖様を迎えた夕方は皆が集まって食事をします。

それから十五日まではお盆棚を作ってご先祖様をお祀りします。お盆棚も様々ですが、卓の上に真菰のござを敷き、その上に蓮の葉を置いて御霊の座を作ります。仏壇から位牌を取り出して、盆棚に置きます。これもご先祖様の里帰りをなぞらえているのでしょう。お盆棚には毎日お供えのお膳が供えられますがこれも地方によって色々のようです。また、胡瓜やナスで作った牛や馬が置かれます。ご先祖様の乗り物です。あちらから来るときは馬で速く、お帰りは牛でゆっくりという意味だそうですが、滞在時間を長くするためなら両方とも馬のほうが論理的のようです。

お盆中に、各家に出向いて棚経をあげます。これはもともと宗門改めで、切支丹でない証として幕府が強制したとも言われていますが、今では先祖供養の行事になっています。また、お盆の期間中には盆踊りも執り行われます。郡上踊りや阿波踊りが有名です。帰ってこられたご先祖様をもてなす踊りだったといわれますが、生きている者たちのレクリエーションの意味合いも大きいようです。尾張地区では、提灯山の下で盆踊りをするところが多いです。

そして、最後にお施餓鬼が行われます。これはそれぞれの寺院でたくさんの僧侶を集め供養を行うのです。もとは、目連尊者の故事に倣ったものでしょう。本来は時期を問わない行事だったのですが、今ではお盆行事として定着してしまったようです。これも本来はお盆中に行っていたようです。慈眼寺でも、昭和二十年には八月十五日に行い、玉音放送はお施餓鬼の休憩時間に聴いたそうです。今ではお盆中にはとても不可能で、ずっと八月十八日に行っています。お施餓鬼が終ると秋の気配が漂いはじめます。

☆編集後記★

今年は入梅がやたら早く、本当かいなと思っているうちに、梅雨前線がどこかへ行ってしまいました。六月の二十日ごろから、梅雨らしいシトシト雨は降っておりません。そして七月になると、なんと秋の虫まで鳴きはじめたようです。暑さは連日三十五度近くにまでなり、真夏の暑さです。それでも肝心のセミの声は聞かれません。

以前は、梅雨明けといえばシトシト雨が、雷鳴とともにあがり、セミの大合唱が始まって入道雲が沸きあがったような印象があります。いまでは梅雨時の雨も、集中豪雨のような降り方が目立ちます。季節の様子まで変わってしまったようです。これが温暖化の結果なのか何なのか、人間がこんな気候にしてしまったのなら、何となく空恐ろしい気がします。

「慈眼寺たより」第十号
平成二十三年七月十五日発行
ホームページ
←
http://www.ma.ccnw.ne.jp/jigenji/